HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	出土資料からみたアイヌ文化の特色
Author(s)	関根, 達人
Citation	168-181 新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56292
Type	report
File Information	pt3ch4.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 4 章　出土資料からみたアイヌ文化の特色

関根　達人

Ⅰ　はじめに

本発表では、アイヌ民族のエスニシティの形成について、主として出土資料に基づき検討する。発表者は、本州アイヌの考古学的痕跡として、青森県内の中近世遺跡から出土したガラス玉、骨角製狩猟・漁撈具、蝦夷拵の刀装具をとりあげたことがある（関根達人 2007・2008a）。中近世和人社会のなかで異彩を放つこれらの遺物は、アイヌ文化には普遍的にみられ、アイヌ民族の物質文化を特徴づけるものと評価できるのではなかろうか。

発表者は、アイヌ民族の物質文化を次の 3 種類に分類することで、その特色がより鮮明になると考える。

1. 和人社会にはほとんど認められないモノ
2. 和人社会にも存在するが、アイヌ民族がとりわけ偏重したモノ
3. 和産物等の移入品を素材とするが、それに加工を加えるなどし、本来の用途とは異なる使い方をするモノ

本発表では、主としてこれら 3 種類のモノについていくつかの例を取り上げ、それらについて、年代的にどこまで遡れるのか、どのような変遷を辿るのか検討する。次いでアイヌ民族の物質文化の特徴から、彼らのエスニシティの形成の時期と背景について考えてみたい。

Ⅱ　アイヌ民族の物質文化を特徴づけるモノ

アイヌ民族の物質文化を特徴づけるモノには、和人社会にはほとんど認められないモノ、和人社会にも存在するがアイヌ民族により偏重されたモノ、和産物等の移入品を素材とするが、それに加工を加えるなどし、本来の用途とは異なり装飾品として使われたモノがある。これらアイヌ民族の物質文化を特徴づけるモノは、アイヌ墓の副葬品と重なる部分が大きい。

(1) 和人社会にはほとんど認められないモノ

ガラス玉（杉山寿栄男 1936、松井恒幸 1977・78、井上洋一 2003、田口尚 2003、斎藤亜三子 2003、関根達人 2008b・2008c、越田賢一郎 2010）と、骨角製狩猟・漁撈具（大塚和義 1976、石川直章 1982・1998、宇田川洋 1987、福井淳一 1998、種市幸生 1998a・98b、千代肇 2003、高橋健 2008、関根達人 2009）が挙げられる。ともに交易と狩猟・漁撈を生業とする北太平洋の先住民に共通する物質文化である（国立民族学博物館 2001）。

(2) 和人社会にも存在する（した）が、アイヌ民族が偏重したモノ

漆器（金田一京助・杉山寿栄男 1943、北野信彦 2002、田口尚 2002、乾芳宏 2002、田村俊之・

小野哲也 2002、朝倉有子 2010a・2010b）と太刀（蝦夷拵）が該当する。どちらも擦文文化から引きつがれたアイヌ民族独自の価値観を反映しており、そうした価値観は古代日本に由来すると考えられる。

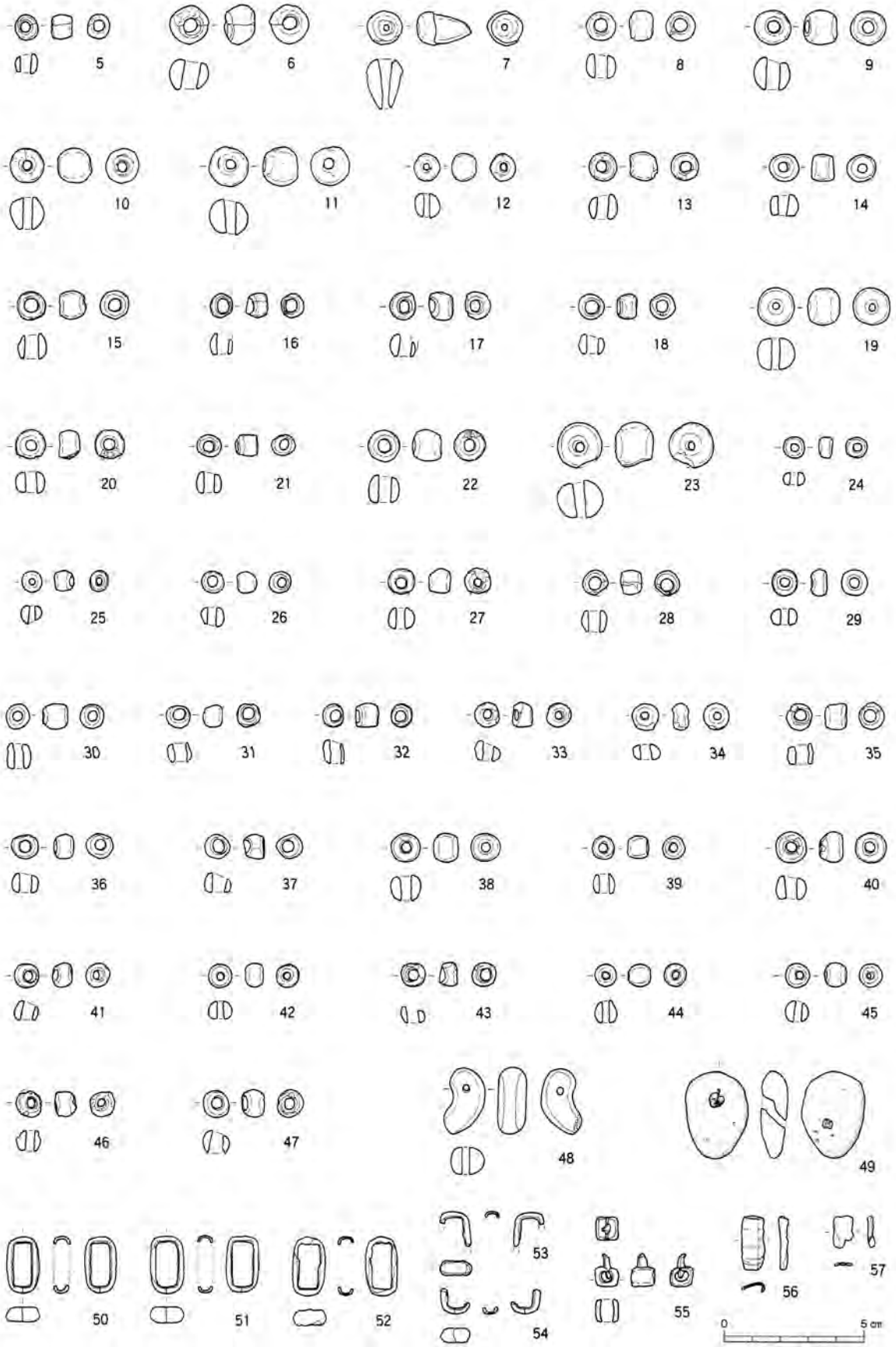
(3) 和産物等の移入品を素材とするが、本来の用途とは異なる使われ方をしたモノ

和産物といわれる日本文化のモノが、アイヌ文化において日本文化で使用されていた本来の目的とは異なる使われ方をされることは、これまでにもしばしば注目されてきた(深澤百合子 2003 ほか)。具体的には和鏡・刀装具・銭・煙管などの金属製品が、タマサイなどの装身具の部材に転用されることが多い。

厚真町オニキシベ 2 遺跡 1 号土抗墓からは、12 世紀後葉から 13 世紀前葉に造られた山吹双鳥鏡を鍔形に加工し、二個一対の孔を開けたシトキが出土している（図 1)。

日本刀の刀装具では鍔に加え、太刀に使われる足金物と七ツ金がタマサイの部品に転用されている。七ツ金をガラス玉とともに使ったタマサイは、擦文末期に位置づけられている根室市穂香竪穴群 H11（北海道埋蔵文化財センター 2002）と伊達市有珠オヤコツ遺跡配石墓Ⅱ号（伊達市教育委員会 1993）から出土している（図 2・3）[註1]。七ツ金は、太刀を佩用するための帯を通す帯執と称されるループ状の革具の足（足革・足緒）を固定する責金具で、足金物との接点には革先と呼ばれる爪形の金具が付く（オヤコツ遺跡配石墓Ⅱ号からは革先も出土している)。足革は 2 本あり、鞘口側の一ノ足には 3 ツ、鞘尻側の二ノ足には 4 ツ、計 7 個の金具が装着されることから、七ツ金と呼ばれる。一般に、鎌倉末期以降七ツ金の足緒は太鼓革に簡略化されるに伴い廃れる傾向にあり、その点においても伊達市有珠オヤコツ遺跡配石墓Ⅱ号が 14 世紀初頭以前に位置づけられるとの見方が正しいことが再確認できる。足金物をシトキとしたタマサイは、共伴する白磁皿 D 群から 16 世紀頃に位置づけられる恵庭市カリンバ 2 遺跡第Ⅵ地点 AP-5 から出土している（図 4)。

図 1 厚真町オニキシベ 2 遺跡 1 号土抗墓出土の山吹双鳥鏡を鍔形に加工したシトキ（筆者撮影）



5 ～ 47 ガラス玉　48 ヒスイ製勾玉　49 有孔凝灰岩　50 ～ 57 銅製品（50 ～ 54: 七ツ金　55: 切子頭の鐶台金具）

図 2 根室市穂香竪穴群 H11 出土タマサイ（北海道埋蔵文化財センター 2002 より転載）

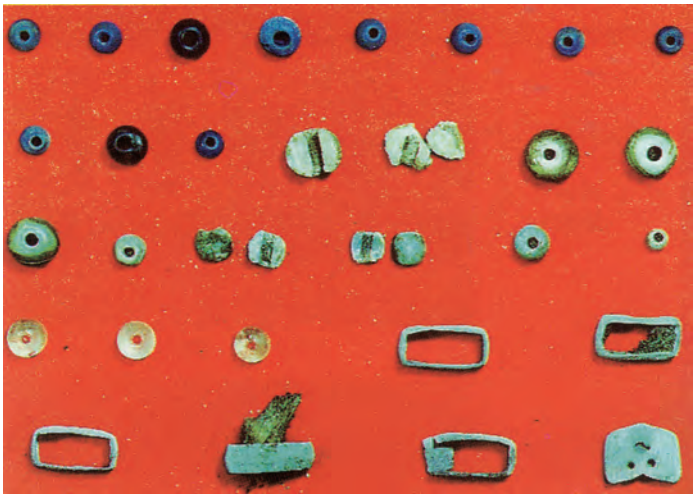


図 3 伊達市オヤコツ遺跡配石墓Ⅱ号出土タマサイ（伊達市教育委員会 1993 より転載）

図 4 恵庭市カリンバ 2 遺跡第Ⅵ地点 AP-5 出土タマサイ（筆者撮影）

Ⅲ　初期アイヌ文化の成立時期と背景

(1) アイヌの物質文化の成立時期

アイヌの物質文化を特徴づける、ガラス玉、骨角製狩猟・漁撈具、漆器と蝦夷刀、和産金属製品を転用した装飾品が出揃うのは 13 世紀末･14 世紀初頭であり、その段階でタマサイ･蝦夷刀･飾り矢筒などは既に定型化している。それとともにアイヌ墓の主要な副葬品（関根達人 2003）もほぼ出揃う。アイヌの物質文化は 13 世紀には成立していたと考えられる。

表 1 13･14 世紀の初期アイヌ文化の墓に伴う副葬品

副葬品	伊達市有珠オヤコツ遺跡		厚真町オニキシベ 2 遺跡	
	配石墓Ⅰ号	配石墓Ⅱ号	1 号土坑墓	3 号土坑墓
タマサイ		○	○(シトキタマサイ)	
ニンカリ			○	○
蝦夷拵の太刀	○	○	○	○
銀円板象嵌飾り矢筒				○
小刀･刀子	○(銀円板象嵌)	○	○	○(銀円板象嵌)
骨鏃		○		
漆器		○	○	
鉄鍋	○			○
その他	鍔状金属板 小札 釣針		鉄斧 針 腕輪	

(2) 初期アイヌ文化の大陸的要素

アイヌ民族の北方交易に関しては、青銅製装身具やガラス玉を論拠とする考察があるが、詳細に関してはあまり検討されていない（菊池俊彦 1994）。近年、厚真町ニタップナイ遺跡から出土した断面 Z 字状の鉄鏃がアムール女真（パクロフカ）文化の産物であることが判明し、注目を集めた（菊池俊彦 2010）。

筆者は、コシャマインの戦い以前、すなわち 13 世紀から 15 世紀前半までの初期アイヌ文化にみられる方形配石茶毘墓、ワイヤー製装身具、小型のトンボ玉･メノウ玉、金属板象嵌技法は、いずれも大陸に由来すると考える。そして 15 世紀後半以降、アイヌ文化における大陸的要素は急速に希薄になると考える。

【方形配石茶毘墓】

伊達市オヤコツ遺跡方形配石墓Ⅰ・Ⅱ号（伊達市教育委員会前掲）と余市町大川遺跡迂回路地点 P-41（余市町教育委員会 2002）が該当する。

オヤコツ遺跡の方形配石墓は、幅約 0.5m、深さ 0.5m の溝を一辺が 4 ～ 5m の方形に掘り、溝のなかに近くの河口や河川で採取されたと考えられる径 20cm 前後の礫を積み上げている（図 5･6）。Ⅰ号墓には成人男性と女性の 2 体、Ⅱ号墓には熟年男性、14 ～ 16 歳の男性、9 ～ 10 歳の男性、壮年女性、12 ～ 15 歳の女性、計 5 体が南頭位仰臥伸展で合葬され、その場で焼かれていた。多量の炭化材が検出されたⅡ号墓の場合、遺体を砂で覆った後、その上に仮小屋（殯屋？）

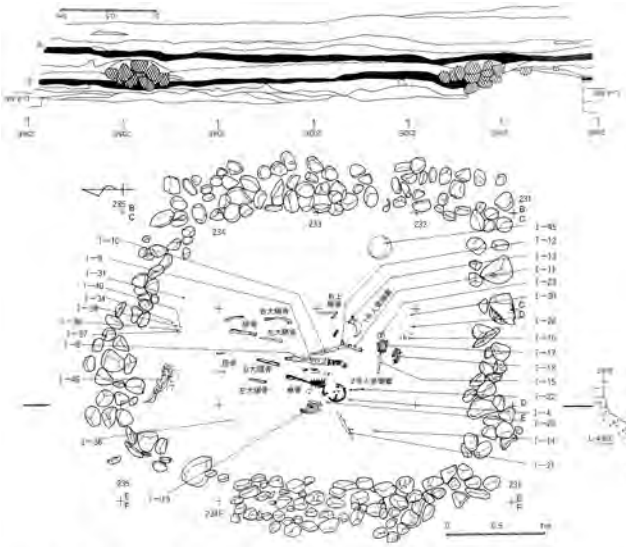


図 5 伊達市オヤコツ遺跡方形配石墓Ⅰ号
（伊達市教育委員会 1993 から転載）

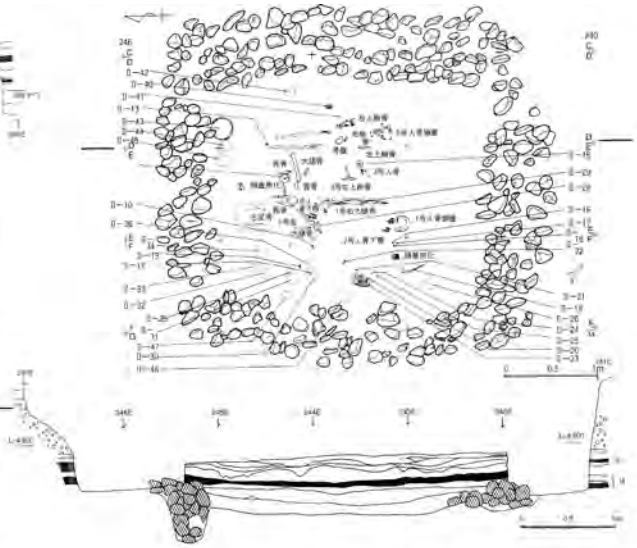


図 6 伊達市オヤコツ遺跡方形配石墓Ⅱ号
（伊達市教育委員会 1993 から転載）

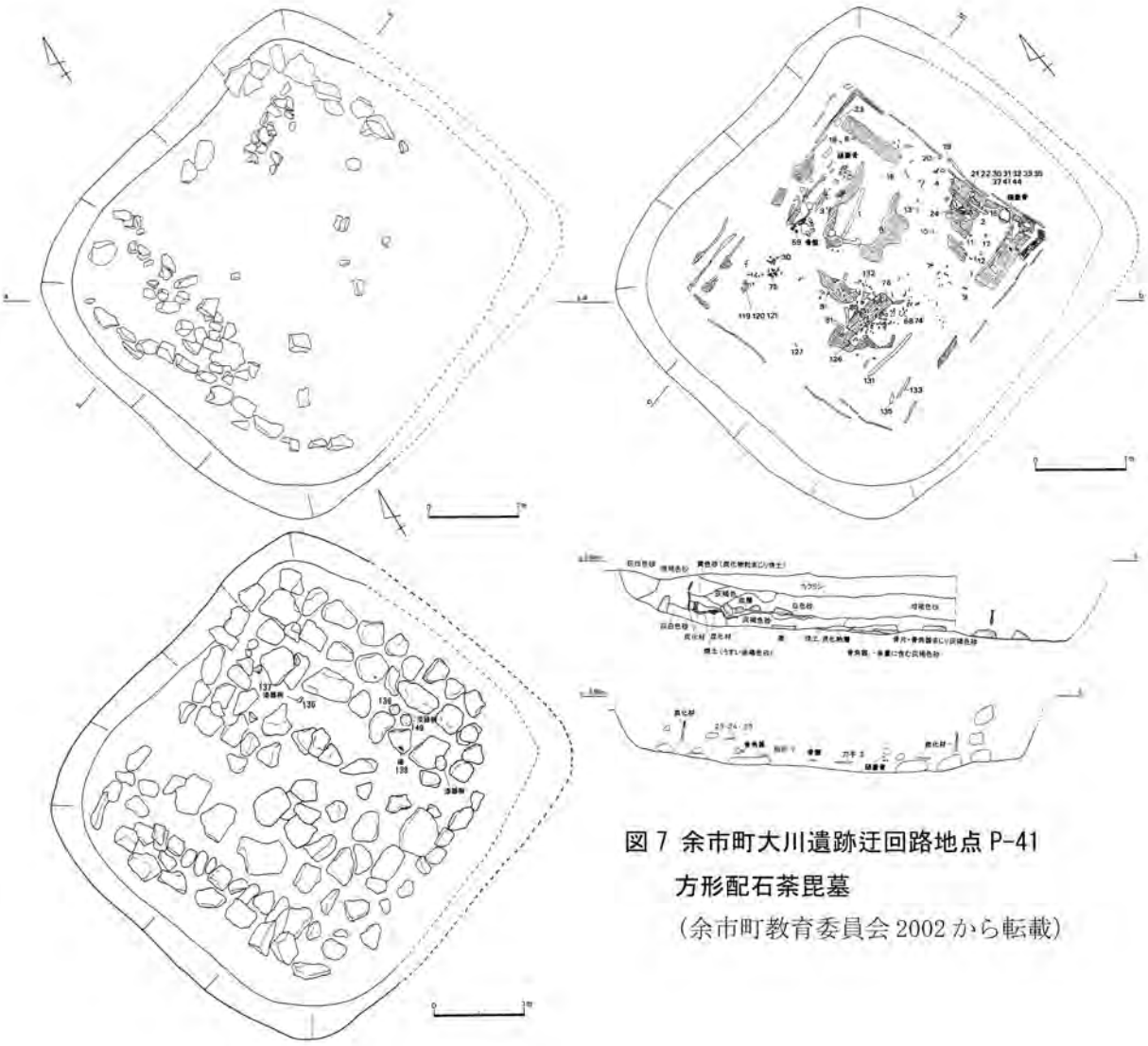


図 7 余市町大川遺跡迂回路地点 P-41
方形配石茶毘墓
（余市町教育委員会 2002 から転載）

を建て、それを燃やしたとの推定がなされている。

大川遺跡迂回路地点 P-41 は、約 4.8 × 4.4m の隅丸方形の墓壙を掘り、底面に扁平な角礫を敷き、その上に約 3m 四方にクリ材の木枠を置き、その外側に角礫を配置している（図 7）。木枠内に複数の遺体と副葬品を納めた後、それらを焼き、砂で埋めている。なお、この遺構は出土した青磁鎬蓮弁文碗や青磁双魚文皿などから 14 世紀に位置づけられる。

オヤコツ遺跡と大川遺跡では相違点もあるが、①石を方形に配する、②複数の遺体を合葬している、③埋葬施設が荼毘所となっている、など重要な点で共通性が窺える。

アムール川流域のパクロフカ文化（アムール女真）では、11 世紀末に火葬（クレマーツィヤ）が現れ、土壙墓墓地では埋葬地点の上で荼毘が認められる（IU.M. ワシーリェフ 1989）。ナデジュジンスコエ墓地では、女性と幼児の合葬例（89 号墓）や、「埋葬焼却の仮屋」の痕跡（90 号墓）も確認されている。ワシーリェフによれば、「女真文化」の火葬は、「靺鞨」以来の伝統的な葬法である土葬に伴ったエグスグマーツィヤ（遺骨掘り出し・棺焼却、すなわち除厄浄化儀礼）が発達・複雑化したものと考えられている。

方形配石墓についても沿海地方の渤海の遺跡にみられる石室墓に起源を求めることができよう（図 8）。沿海地方オクチャブリ地区のスイフン川右岸に位置するチェルニャチノ 5 遺跡から発見された墓は全て二次的な火葬を受けているが、そのなかに、土壙の底部に石を敷き詰め、遺体を納めた棺もしくは木製構造物を置いて火をつけるものや、土壙内に遺体を納めた棺もしくは木製構造物を置き、土壙の周りを石で囲い、焼く墓が報告されている（清水信行 2008）。六頂山墓地遺跡やクラスキノ土城西門外などで発見されている渤海時代の石室墓は規模が大きく形態も整ったものが多い（王承礼・曹正榕 1961・王承礼 1979）。年代が下るにつれ簡略化し、オヤコツ遺跡や大川遺跡の方形配石荼毘墓へとつながるものと推測する。

以上、方形配石荼毘墓は、擦文文化やオホーツク文化に起源を求めるこれまでのアイヌ墓の成立過程に関する見解（宇田川洋 1992）から逸脱するものであり、初期アイヌ文化の大陸的要素として重要視される。

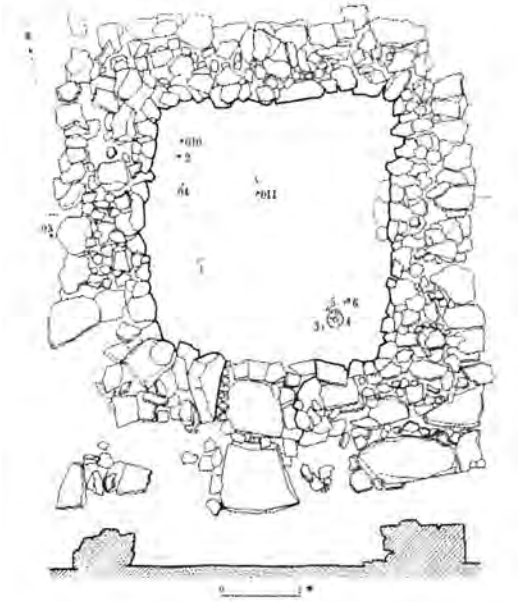


図 8 吉林省延辺朝鮮族自治州敦化市六頂山渤海古墓群 207 号墓（清水信行 2008 から転載）

【ワイヤー製装身具】

ワイヤー（針金）状の鉄線をコイル状に巻き上げることでつくられた、頂部に円環が付く滴形の垂飾は、北見市ライトコロ川口遺跡 12 号竪穴内墓壙で初めて発見され、「コイル状の鉄製品」として報告された（東京大学文学部 1980）。報告書の中でこれらの垂飾について検討した新田栄治は、11 点の垂飾が短刀の上に並んだ状態で出土した点に着目し、それらが腰帯・腰枕に吊り下げられていたと推測した。新田は、このように鉄線を螺旋状に巻いた垂飾は類例がみられないとしながらも、金属の垂飾がついた帯は、サハリンからアムール川流域の民族例に見られることから、サハリン方面との関連を考慮すべきとした。また、年代については 12 号竪穴廃棄後まもなくのことであり、それは平安時代末期をさかのぼらない時期であるとした。

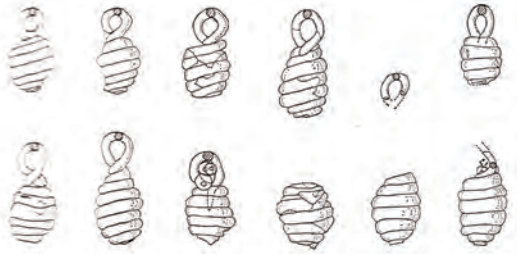
その後、同様の垂飾が平取町二風谷遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1986）・千歳市美々 4 遺跡 IP-9（北海道埋蔵文化財センター 1997））で確認されたほか、同様にワイヤーを素材とし、それを腕輪に組んだものが厚真町オニキシベ２遺跡 1 号墓（厚真町教育委員会 2011）・余市町大川遺跡 GP-4（未報告）・恵庭市ユカンボシ E7 遺跡（恵庭市教育委員会 1995）・恵庭市茂漁 6 遺跡 27 号墓（恵庭市教育委員会 2000a）で、渦巻双頭状・棒状のものが平取町二風谷遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1986）で発見されている（図 9）。ここではこれらワイヤーを素材とする垂飾や腕輪をワイヤー製装身具と呼ぶ。

サハリン・沿海州地域におけるワイヤー製装身具の出土事例はまだ十分に調査できていないが、日本と渤海との交易ルートである「日本道」の出発点の港として注目を集めているロシア連邦沿海地方クラスキノ土城の 2010 年の第 45 調査区に出土事例（未報告資料）がみられると中沢寛将氏にご教示いただいた。クラスキノ土城の資料は 8 ～ 10 世紀であり、北海道内のものとは年代的な隔たりがあるため、今後、両者をつなぐ資料を集める必要がある。

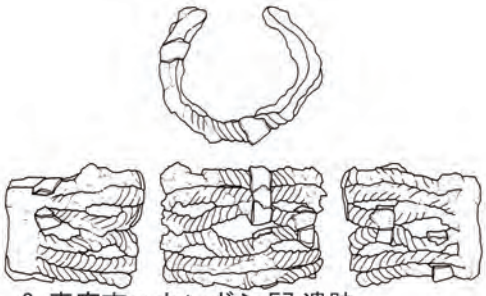
【金属板象嵌技法】

伝世したアイヌの民具には、刀装具、矢筒、鍬形などの武器・武具類を中心に、木胎の表面に銀板や銅板を嵌めた装飾がしばしば認められるが、そうした装飾技法は和物にはほとんど見ることができない。金属板象嵌技法を用いた武器・武具類は、伊達市オヤコツ遺跡配石墓 I 号、厚真町オニキシベ遺跡 3 号土抗墓、平取町二風谷遺跡 2 号墓など初期アイヌ墓から出土しており、古くは 13 世紀以前まで遡ることが確実である（図 10）。オニキシベ遺跡 3 号土抗墓から出土した矢筒に類似するものは伝世したアイヌの民具に散見される。同じような矢筒がこれほどまで長きにわたりほとんど型式変化することなく作られてきたのは驚くべきことである。

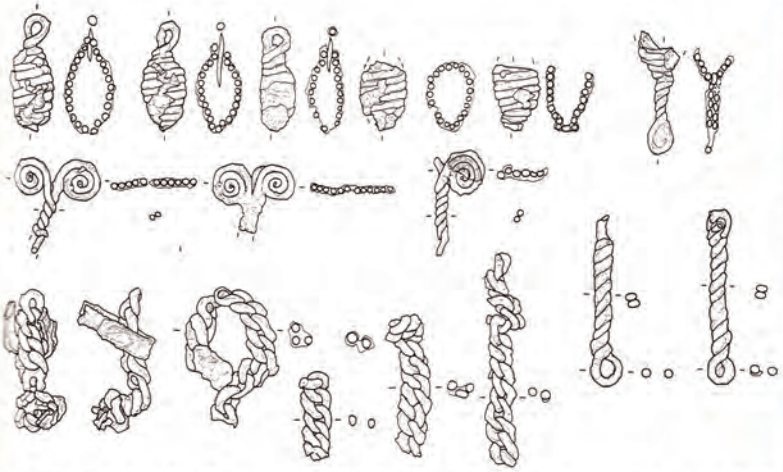
金属板象嵌技法の系譜を考えるうえで注目されるのが、羅臼町植別川遺跡において続縄文時代の 2 号墓から出土した鞘に銀の薄板を象嵌？した刀子である（羅臼町教育委員会 1981）。この資料に注目した藤本強は、「銀製品つきの鉄製刀子は後漢時代を中心とした中国北部の匈奴・鮮卑墓にみられる」と指摘し、北方ルートでもたらされた可能性を示唆した（藤本強 1986）。さらに菊池俊彦は、この刀子について、「銀製品が発見される匈奴・鮮卑・烏桓の遺跡の分布地域から、松花江・嫩江・アムール河（黒龍江）流域を経てもたらされたものであろう」と述べ、より具体的な搬入経路を示した（菊池俊彦 1992・1995）。植別川遺跡の刀子とアイヌ墓から出土する金属板象嵌技法を用いた武器・武具とでは年代的な隔たりが大きいため、直接的な系譜を論じることはできないが、擦文文化やそれに併行する時期の和物に、そうした技法の製品が認められ



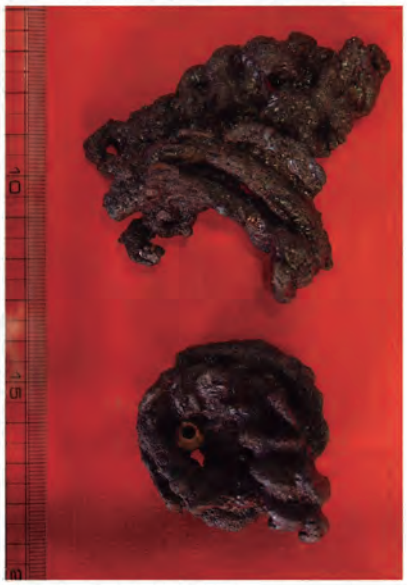
1 北見市ライトコロ川口遺跡 12 号竪穴内墓壙
（東京大学文学部 1980 から転載）



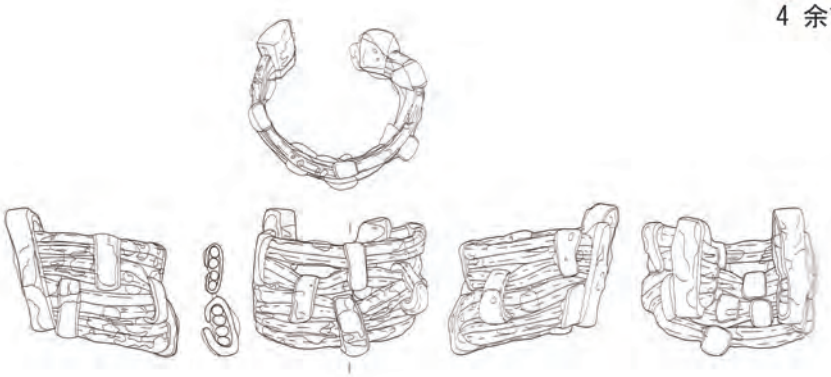
2 恵庭市ユカンボシ E7 遺跡
（恵庭市教育委員会 1995 から転載）

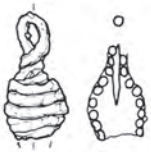


3 平取町二風谷遺跡　（北海道埋蔵文化財センター 1986 から転載）



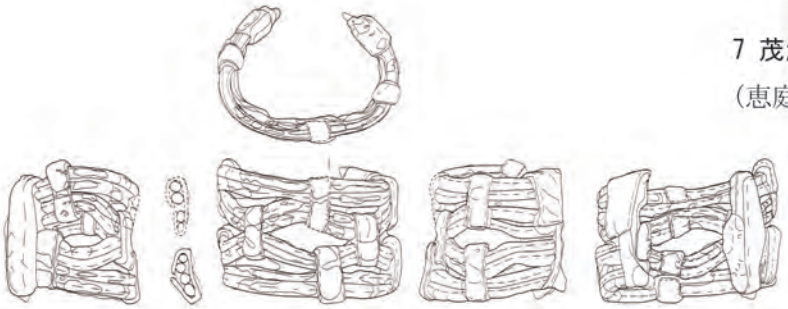
4 余市町大川遺跡 GP-4（筆者撮影）





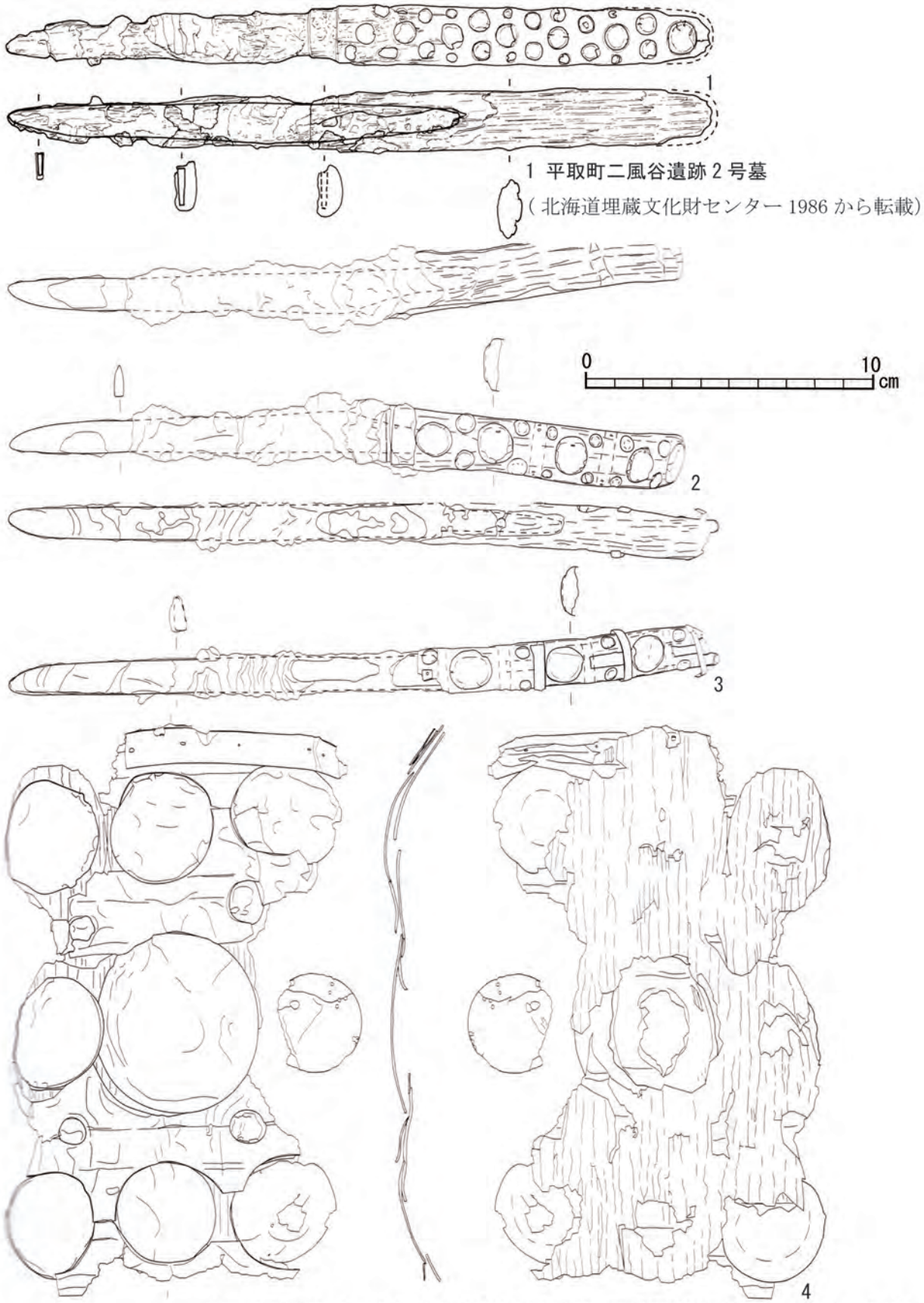
6 千歳市美々 4 遺跡 IP-121
（北海道埋蔵文化財センター 1997 から転載）

7 茂漁 6 遺跡 27 号墓
（恵庭市教育委員会 2000a から転載）



5 厚真町オニキシベ 2 遺跡 1 号墓（厚真町教育委員会 2011 から転載）

図 9 ワイヤー製装身具



2 ～ 4 厚真町オニキシベ 2 遺跡 3 号土坑墓（厚真町教育委員会 2011 から転載）

図 10 金属板象嵌手法が使われた刀子（1 ～ 3）と矢筒（4）

ないことから、初期アイヌ文化期に再び北方ルートで大陸からもたらされたものと考えておきたい。

【小型のトンボ玉・メノウ玉】

筆者は、アイヌ墓から出土した 2,636 点のガラス玉と、北海道開拓記念館・函館市北方民族資料館・苫小牧市立博物館に所蔵されている 311 点のタマサイに使われている計 17,010 点のガラス玉を比較し、アイヌのガラス玉の変遷を検討したことがある（関根 2008a）。そのなかで 15 世紀以前のタマサイやガラス玉の特徴として次の点を指摘した。

① ガラス玉以外に、鉄製コイル状垂飾（本稿でいうワイヤー製垂飾）、目貫、サメの歯・銭・紐金具などいろいろなものが使われている。

② ガラス玉の形状は、丸玉・平玉のほか、滴玉、瓢箪玉、蜻蛉玉、蜜柑玉、切子玉、管玉と変異に富む。

③ 青が 3 割強、緑が 1 割強を占めるが、その他の色も多いものから順に透明、トンボ玉、黒、茶、白、赤、黄、灰と多彩である。

④ トンボ玉は全体の 1 割弱を占め、散花、散点、流水の 3 種がみられる。

ガラス玉の主体を占める平玉・丸玉を、長径を基準に、大玉（2cm 以上）、中玉（1cm 以上 2cm 未満）、小玉（1cm 未満）に分けたところ、17 世紀以前のものは小玉がガラス玉全体の 8 割前後を占めており大玉は全く見られないのに対して、伝世品では中玉が全体の約 7 割を占め、大玉も 1 割弱であるが存在することから、18 世紀以降、ガラス玉の大型化が進んだことが判明した。

ガラス玉の色は、出土品では青系が最も多く、伝世品では青系よりわずかに黒系の玉が多い。出土品では、トンボ玉は 15 世紀以前に多く、16・17 世紀代には青系・緑系のガラス玉の比率が非常に高い。16・17 世紀に比べ 15 世紀には多彩なガラス玉が使われており、タマサイ＝青玉という図式は 16・17 世紀に確立、18 世紀以降、おそらくは 18 世紀末から 19 世紀にかけて、再びガラス玉が多彩になったと結論付けた。15 世紀以前の小型のトンボ玉は中世の日本国内には伝世品・出土品ともに類例が確認できないことから、大陸でつくられたものがサハリン経由で持ち込まれたのであろう。

メノウ製の玉類は、厚真町オニキシベ遺跡 1 号墓から丸玉 1 点、切子玉 2 点、管玉 2 点、恵庭市カリンバ 2 遺跡第Ⅵ地点 AP-5 からは管玉 1 点とメノウ製の可能性のある丸玉が出土している（厚真町教育委員会 2011、恵庭市教育委員会 2000b）[註2]。これらアイヌ墓から出土するメノウ玉については、アムール女真（パクロフカ）文化に由来するとの指摘がある（厚真町教育委員会 2011、乾哲也 2011）

Ⅳ　結語

アイヌ文化は基本的には擦文文化をベースとし、それが 13 世紀にはじまるサハリン島への北方進出に伴い、アムール河（黒龍江）下流域の女真文化との文化的接触により「化学変化」を起こしたものと考える（アイヌ文化は本州北端部に住むエゾが北海道島へ移住した結果成立したのでは決してない）。コシャマインの戦い以降、サハリン・沿海州と北海道島との文化的接触は、それ以前に比べ格段に低調となるとみられるが、それでも途切れることはなく、「ガラス玉の道」

として「蝦夷錦の道」として、日露間の国境問題が顕在化する 19 世紀まで継続されたのである。

【註】

1) 根室市穂香竪穴群 H11 出土のタマサイに使われていた銅製品については、久保智康氏のご教示を得た。久保氏によれば、切子頭の鐶台金具（図 2-55）は大きさからみて兜鉢の後頭　部に付く鐶台か、小型の被せ蓋式の箱類の紐掛け金具としての鐶台と考えられる。

2) 恵庭市カリンバ 2 遺跡第Ⅵ地点 AP-5 から出土した管玉については、報告書（恵庭市教育委員会 2000b）に材質に関する記述がなく、資料を実見した乾哲也氏からメノウ製である　とのご教示を得た。乾氏のご教示により、改めて筆者が以前資料調査した際に撮影した写　真（図 4）を確認したところ、管玉以外に丸玉のなかにもメノウの可能性のあるものが存　在していることがわかった。

引用文献

朝倉有子 2010a「蝦夷地における漆器の流通と使途―浄法寺から平取へ―」『都市と城館の中世』175 ～ 198 頁 高志書院

朝倉有子 2010b「蝦夷地における漆器の流通と使途－椀（盃)･盃台･台盃」『北海道･東北史研究』64 ～ 50 頁 北海道出版企画センター

厚真町教育委員会 2011『オニキシベ 2 遺跡』

石川直章 1982「回転式銛先：キテの源流」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ 1 19 ～ 28 頁

石川直章 1998「回転式銛先再考」『時の絆』293 ～ 313 頁 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会

乾哲也 2011「厚真の遺跡を支えたもの－交易・シカ資源」『アイヌ史を問いなおす』57 ～ 80 頁 勉誠出版

乾芳宏 2002「海の民としてのアイヌ社会の漆器考古学－余市町大川･入舟遺跡を中心として－」『考古学ジャーナル』489 16 ～ 19 頁 ニューサイエンス社

井上洋一 2003「歴史的にみた日本におけるガラス玉の製作と流通」『北太平洋の先住民交易と工芸』53 ～ 58 頁 思文閣出版

宇田川洋 1987「北方地域における開窩式銛頭について (1)」『北海道考古学』23 45 ～ 58 頁

宇田川洋 1992「アイヌ墓の成立過程」『北の人類学』257 ～ 281 頁 アカデミア出版会

宇田川洋 2007『アイヌ葬送墓集成図』北海道出版企画センター

恵庭市教育委員会 1995『ユカンボシ E7 遺跡』

恵庭市教育委員会 2000a『茂漁 6 遺跡』

恵庭市教育委員会 2000b『カリンバ 2 遺跡第Ⅵ地点』

大塚和義 1976「アイヌのキテの諸系列」『国立民族学博物館研究報告』1(4)　778 ～ 822 頁

菊池俊彦 1992「銀の道－北海道羅臼町植別川遺跡出土の銀製品に寄せて」『郵政考古紀要』19 35 ～ 56 頁

菊池俊彦 1994「アイヌ民族と北方交易」『北方史の新視座』97 ～ 113 頁 地方史研究協議会編 雄山閣

菊池俊彦 1995『北東アジア古代文化の研究』北海道大学出版会
菊池俊彦 2010「厚真町ニタップナイ遺跡出土の鉄鏃について」『北海道考古学』46 183 ～ 188 頁
北野信彦 2002「アイヌ社会の漆器考古学が意味するもの」『考古学ジャーナル』489 4 ～ 6 頁 ニューサイエンス社
金田一京助・杉山寿栄男 1943『アイヌ芸術』3（金工・漆器篇）第一青年社
国立民族学博物館 2001『ラッコとガラス玉』
越田賢一郎 2010「ガラス玉の道」『北東アジアの歴史と文化』431 ～ 453 頁 北海道大学出版会
斎藤亜三子 2003『アイヌ民族のガラス玉に関する考古科学的研究』財団法人アイヌ民族博物館
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2001『よみがえる北の中・近世』
清水信行 2008「チェルニャチノ 5 墓地遺跡の発見」『北東アジアの中世考古学』アジア遊学 107 112 ～ 114 頁 勉誠出版
杉山寿栄男 1936『アイヌたま』今井札幌支店
関根達人 2007「本州アイヌの生業・習俗と北奥社会」『北方社会史の視座』1 217 ～ 250 頁 清文堂
関根達人 2008a「本州アイヌの考古学的痕跡」『北東アジアのなかのアイヌ世界』317 ～ 343 頁 岩田書院
関根達人 2008b「タマサイ・ガラス玉に関する型式学的検討」『北東アジアのなかのアイヌ世界』125 ～ 150 頁 岩田書院
関根達人 2008c「北のガラス玉の道」『考古学ジャーナル』579 12 ～ 15 頁 ニューサイエンス社
関根達人 2009「本州アイヌの狩猟と漁撈」『動物と中世』155 ～ 186 頁 高志書院
高橋健 2008『日本列島における銛猟の考古学的研究』北海道出版企画センター
田口尚 2002「中・近世アイヌ社会における漆器考古学の動向」『考古学ジャーナル』489 12 ～ 15 頁 ニューサイエンス社
田口尚 2003「低湿地遺跡から出土したアイヌのガラス玉」『北太平洋の先住民交易と工芸』59 ～ 66 頁 思文閣出版
田村俊之・小野哲也 2002「陸の民としてのアイヌ社会の漆器考古学－千歳市末広遺跡を中心に－」『考古学ジャーナル』489 20 ～ 24 頁 ニューサイエンス社
伊達市教育委員会 1993『伊達市オヤコツ遺跡・ポンマ遺跡』
種市幸生 1998a「キテをめぐる諸問題（前編）：雌型銛頭の分類について」『列島の考古学』1 ～ 11 頁 渡辺誠先生還暦近年論文集
種市幸生 1998b「キテをめぐる諸問題（後編）」『時の絆』315 ～ 347 頁 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会
千代肇 2003「神恵内観音洞窟とアイヌ文化」『考古学に学ぶ』Ⅲ 同志社大学考古学シリーズ 8 699 ～ 708 頁
東京大学文学部 1980『ライトコロ川口遺跡』
深澤百合子 2003「アイヌ文化とは何か」『新北海道の古代 3　擦文・アイヌ文化』102 ～ 117 頁

北海道新聞社
福井淳一 1998「アイヌ文化における銛漁の諸段階」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集 435 ～ 463 頁
藤本強 1986「オホーツク海をめぐる交流」『日本の古代』3（海峡をこえての交流）233 ～ 264 頁 中央公論社
北海道埋蔵文化財センター 1986『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北埋調報 26
北海道埋蔵文化財センター 1997『美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ』北埋調報 113
北海道埋蔵文化財センター 2002『根室市穂香竪穴群』北埋調報 170
松井恒幸 1977「北のガラス史のための覚書」『市立旭川郷土博物館研究報告』11 1 ～ 34
松井恒幸 1978「北のガラス史のための覚書Ⅱ」『市立旭川郷土博物館研究報告』12 1 ～ 32
羅臼町教育委員会 1981『植別川遺跡』羅臼町文化財報告 6
余市町教育委員会 2002『余市町大川遺跡（2000･2001 年度）』
王承礼・曹正榕 1961「吉林敦化六頂山渤海古墓」『考古』298 ～ 301 頁
王承礼 1979「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」『社会科学戦線』200 ～ 210 頁
IU.M. ワシーリェフ 1989「アムール流域のパクローフカ文化（9-13 世紀）の火葬」『ソ連極東地方中世考古学の新資料』ウラジオストーク（『北海道考古学』30 1994 年に天野哲也訳で転載）